令和４年度　第４回八雲町総合開発委員会

【開催日時・場所】

令和５年３月 30 日（木）　午後１時 30 分～午後３時 30 分

八雲町役場　３階議員控室

【出席者】

別紙名簿のとおり

【 内　容 】

１　開会

２　委嘱状交付

北海道労働金庫八雲支店　杉浦則昭氏に委嘱状を交付

３　町長挨拶

令和４年度第４回八雲町総合開発委員会、大変お忙しい中ご出席いただきありがとうございます。コロナが５月８日から５類となりマスクを外せることとなっておりますが、皆様もようやく解放される思いがあるのではないでしょうか。本日の総合開発委員会では令和５年度の予算概要について説明致しますので忌憚のない意見をいただき進めて参りたい。よろしくお願い致します。

４　会長挨拶

ようやく雪も解け春らしくなりました。本日は、年度末で大変お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。コロナもなかなか終わりの見えないなか、５月から２類から５類にかわり、一般のインフルエンザと同じ扱いになるわけですが、これまで通り感染予防には十分に気を付けていただきたい。

本日の会議は、報告事項が３件あります。委員のみなさんから忌憚のない意見をよろしくお願い致します。

５　答申

事務局（右門）より経過報告

【大野会長から町長へ答申】

６　報告事項

（１）第２期八雲町総合計画 実施計画書（令和５年度～令和７年度）について

事務局（右門）より説明
〇質疑応答
【佐藤委員】
町有財産の売買について、広報等で見ておりますが近年の主な（大きい）町有地の売買についてお聞かせください。もう一点、木彫り熊 100 周年記念事業の進行状況を教えてください。
【総務課長】
町有地の売買の関係ですが、令和５年度は栄町にある学童保育所の土地について、財務省から長年借り受けていましたが、令和５年度に予算化して土地を購入する予定です。また、都度町民の方からのご相談に乗らせていただき、売買や賃貸をしている状況です。
【教育長】
木彫り熊 100 周年記念事業の令和５年度の予算について説明させていただきます。木彫り熊は令和６年３月に 100 周年となり、大規模な記念イベントについては令和６年９月を予定しております。
令和５年度は記念イベントの準備の年として、木彫り熊のルーツ等を町民の方々にお知らせできるよう事業を進めます。義親公が辿ったスイスのルートの視察や記録を行い 100 年の時を超えてどのように時代や物事が変化しているのか町民の皆様の記憶に残るよう検討しています。また、ブリエンツを訪問し、100 周年の記念品として何らかを交換・交流できないか、この２つのことを目的にスイスへの出張を考えています。また、３月には特別展や記念講演ができればと考えており、ポスターの設置を行いながら 100 周年を迎えることとしています。
【佐藤委員】
スイス訪問についてですが、訪問される方々の選考はどのように考えていますか。
【教育長】
４名での体制を考えています。義親公が辿ったルートということで徳川様にご協力・ご同行いただけるよう折衝を行っている状況であり、徳川様からは２名お願いするとともに、ブリエンツと記念品の交換や交流の交渉を行うために教育委員会からも責任のある立場のもの２名で訪問し、交流や今後の約束を進めていきたいと考えています。
【阿部委員】
木彫り熊 100 周年について、徳川義親公が大正 10 年から 11 年にかけてヨーロッパを訪問されたのは事実であるが、単に旅行ではなく、奥様である米子さんを伴って義親公の体調の悪化から東京の湿度の高い環境では治りにくいということもあり、マレーシアに行き療養していたが結果的に改善されずヨーロッパにいったというのが事実である。義親公と米子さんの旧跡を辿るという意味からいうと木彫り熊 100 周年ということでは直接結び付かないのではないか。スイスのブリエンツ地方の工房で木彫り熊を見つけて買ってきたが、木彫り熊だけでなく木彫品等も購入し大正 11 年に帰ってこられて翌年大正 12 年に徳川農場

の方に木彫り熊や木彫品を送ったことが木彫り熊のルーツになっていると認識している。要は、徳川家由来の方２名と八雲町から２名の４名が今年の９月～11 月にかけてスイスを訪問するということだが、経費をかけてまで行う必要があるのか疑問に思う。

また、ルーツを辿って木彫り熊を購入した経緯を考えているのならば、放送局等にドキュメンタリー番組などの共同制作等をお願いすることはどうかと考えたが、2008 年にＨＴＢの開局 40 周年として、宇梶剛士さんがガイド役とし「カムイの夜明け」で北海道八雲町木彫り熊のルーツを辿る番組制作はすでにやっており、同じように制作しても二番煎じになるものと考えられた。このことを町の学芸員にお聞きした際、講演会等の映像での利用や子供の教材での使用など漠然としたものとなっており、それであれば「カムイの夜明け～木彫り熊 誕生の謎は遥かスイスに～」の著作権等を購入するなどでも良いのではないか。

もう一点、地域高校就学支援事業について、この事業は素晴らしいことだと思っている。地元八雲高校に対して通学、下宿、模擬試験、通信講座、各種検定などに補助するということで 662 万円を支出するとのことだが、延べにして子供の数にして 353 人に対して、次年度行うということで親の軽減負担や子供の学習意欲を向上するという点では極めて優れた方策だと思う。

しかし、この間、論議されてきていないが、八雲高校の総合ビジネス科において今年の受験者定員 40 名に対して４名しかいなかった。2021 年は 40 名に対して 15 名、2022 年は 40 名に対し 12 名である。北海道教育委員会の間口減の基準では、３年間続けて 20 名以下であれば間口減を行うことが出来るという内容になっている。子供たちに様々な支援をすることによって学習意欲の向上や家庭の親の負担が軽減されることとは別の問題として、八雲高校の総合ビジネス科をどうするかということについての視点が欠落している気がする。今年の八雲中学校、熊石中学校も含め４校の卒業生が 88 名となっているが八雲高校に進学したのが 53 名で 60.2%、定員 120 名に対して 53 名より受験していない状況。併せて 62 名の進学者に対して、残り９名の方は町外もしくは町内で新しく受け直すなどであり、総合ビジネス科の問題は間口減ありきになっている。北海道教育委員会の策定した高校配置計画は令和７年まで定まっており、令和８年以降の話しになると思うが、この間口減の問題が喫緊の課題になっている。八雲町や八雲高校さらに八雲高校 PTA や八雲高校同窓会、総合ビジネス科に関わる商工業者、民間の団体を含めた方々で八雲高校間口減を考える協議会等の設置をして対応していく必要があるのではと考えているが認識をお伺いしたい。

【教育長】

木彫り熊 100 周年事業についてですが、100 周年という節目にルーツを辿りつつ、徳川家開墾の歴史に思いをはせて、町民の皆様に節目にあたって記憶をしっかり持っていただきたいという考えであります。義親公が歩いた経緯や宇梶さんが行った関係性などから、事業としてはいかがなものかというご意見かと思いますが、木彫り熊が注目をされていることを押さえ、100 周年という節目にしっかりとしたものを残していくことが大事だという考えであります。木彫り熊の歴史を大切に扱っていきたいという想いからスイスへの訪問が必

要と考えたところですが、実際に予算が確定し動き出しがこれからとなるため、今後も色々な調整やご協力を賜ることがあるかと思います。このような中で、当初の考え方から少し変化があるかも知れませんが、節目の 100 年をしっかりＰＲアピールできるように取り組んでいきたいと考えています。

八雲高校の関係についてですが、今後の将来像を見据える組織作りが必要との意見だと思います。おっしゃる通り現状は非常に厳しい状況であります。中学３年生の学生が少ない年である中、八雲高校への進学率は 60%程度が例年続いているもので、高校のビジネス科の間口を維持することは非常に厳しい状況だということは同じ認識であります。

商業科という学科の始まりは、戦後女性もしっかり働いていこうということから始まった学科であり、現状は商業科の在り方については全道的に非常に厳しい状況となっております。道教委の受験生・保護者アンケートでは、普通科志向が非常に高く７割以上は普通科を受けさせたいということもあり、八雲町も同様のところかと思っています。平成３０年に新しい産業振興棟、特別教室棟、図書室が建設され、総合ビジネス科はもとより普通科も活用しながら学校教育内容の充実を図っていくことも可能だと考えており、中高が連携し高校を卒業して、どう社会に羽ばたいていくか、教育を充実させていこうと取組を始めるところです。検討する組織を立ち上げることは良い要素かと思いますが、現状では高校に求められているのは普通科であり、学力、進路など長い将来に向かって求められているものだと思っています。

学校関係者が協力して八雲高校の学力内容の充実、特色ある学校、魅力ある学校づくり、八雲高校生と役場、まちづくりに対する意見交換の場をしっかり持って、キャリア教育などを有効に活用し、魅力のある学校づくりを役場と教育委員会で一体となって取り組んでいきたいと思っています。

【阿部委員】

八雲高校総合ビジネス科の間口減は止むなしという状況に立っていると聞こえたが、そうではないと思っている。３年間で 20 名以下であれば間口減止むなしという道教委の方針の中、令和７年までは配置計画が明確になっているが、令和８年以降については今後検討されるということである。今後、普通科２つになってしまうという事は、子どもたちの志向も含めると実状からやむを得ないという認識か。

木彫り熊も確かに局地的にはブームになっているかも知れない。2019 年に熊彫り図鑑を発刊された安藤夏樹さんが東京のギャラリーで木彫り熊を展示すると 8,000 人集まったということもあったし、去年の 11 月 30 日には北海道レストラン「KIBORI」がオープンした。森町から木彫り熊を貸与などして行っているとのことで、「北海道酒場森町しげぞう」を経営している母体があり、その関連団体が「KIBORI」というレストランをつくったとのこと。木彫りブームに乗った訳ではなく、北海道のイメージをレストランに浮かべた場合に、何があるかということで辿り着いたのが木彫りだということ。一連の流れから木彫り熊が見直されたということではない。もしかしたら一過性かも知れないし、もっと中身の濃いものと

考えていくためには、徳川さんの足跡を辿るということだけで、果たして良いものかどうかという事でお話させていただいた。今後検討いただきたい。

【教育長】

道教委の高校作りの指針に照らし合わせ、文言通りに読み合せると厳しい状況であり、学科単位で40名募集し4名というのは全国最低だったと認識しており、現実的には確かに厳しい状況であります。八雲高校の3間口に対し、普通科や総合ビジネス科の改革というものに照し合せると、普通科〇〇科など特徴を出すことで生徒を呼び寄せることができないかなど、今後、道教委において検討されると思います。学科の教育内容の充実にしっかりと地元として関わり、厳しい現実はわかっているが学校づくりにコミットしていきたいと思っています。

木彫り熊について、阿部委員の言う通り一つのブームであり、全体ではなく一部という考えも確かにあると思います。そのような考えも参考にした上で、より充実した 100 周年になるよう検討を進めて参ります。

【近藤委員】

八雲高校総合ビジネス科についてですが、私もビジネス科出身でありPTA会長も経験しております。当時は3クラスありましたが、今回、4名しかいないことを考えると八雲町として何を行ってきたのかということですが、決してこれまで何もしていないわけではなく、町と商工会、株式会社木蓮において、総合ビジネス科とマッチングして何かできないか、1年かけて検討してきました。最初は個人的に何かできないか考えていましたが、まちづくり会社である木蓮は人材を作る会社ということですので、木蓮として令和5年度より本格的に事業を行うこととなりました。

令和4年度は高校に2回ほど伺い、総合ビジネス科の生徒に対し木蓮と商工会青年部が講師となり授業を行いました。講師を担った方の感想としても、生徒の目が輝いていると意欲的なものと捉えています。令和5年度は仮想ビジネスを行いたいと計画しており、学校の株式会社を立ち上げ、商品の製造や販売を生徒自身が行い、商工会等が資金などを応援するという実際の民間の会社としての経験を積ませてみたい。このような活動の輪を広げ事業を進めていくことが、総合ビジネス科の維持に繋がると考えています。

また、何故、町の補助金を入れていないかという事ですが、縛られず生徒に自由に行って欲しいことからとなります。町だけでなく、民間として何かを支援したいと考え、色々な事を行っていくことが八雲の活性化には必要と考えます。このような取組もありますので、何も行っていないのではなく、このような取組もあることを認識していただきたい。

（2）令和5年度予算概要について

財政課長より説明

〇質疑なし

（3）令和5年度主要事業の説明について

Ｕ・Ｉターン就職奨励事業
労政係長より説明。
【佐藤委員】
説明いただいた事業は非常に大事なことである。人口減少はどの市町村でも頭を抱えている問題であり、都心志向から八雲町を離れていく。また、地元に働く場所がなければ戻ってくることも大変な状況であり、町長がこの発想にいち早く取り組んだことは高く評価しているとともに、制度の PR が重要であると思います。
私が感じているのは、お子さんが八雲に就職がないことから八雲を離れて行く。ご両親は、お子さんはどうしているのか心配であり、こまめにやりとりをしている。また、息子、娘が帰省するとなると、そのような費用も大変で親が負担している。そういうことを考えると地元に帰ってきて親と一緒に暮らすのが非常にいいことであり、この制度に沿っていることだと思っている。テレビで見たが、道東の町長が、町に人が入るように町長自ら自分の家を開放して宿泊者無料という施策をしているのをテレビで見た。一人でも人を連れてくる取組は重要であり、ユニークな発想は今の時代を物語っていると思う。当該事業においても周知することが大事であり、インターネットなど今の実態に沿った形や、10 月には八雲高校 100 周年の機会などで周知するのが良い。私は、八雲町は他の町よりずっと素晴らしい町だと思っており、より多くの八雲町の良いところを発信して行く必要がある。八雲は懐かしい風景のある街であり、パノラマから見た風景、育成牧場から見た風景、雲石 277 号線の峠は道南八景と言われるなど、どの風景も素晴らしい。また、木彫り熊の発祥地であり、文化の町、花の町、素晴らしい色々な要素がある町である。このような事を知らない人がまだまだいるのではないだろうか。多くの魅力を様々な方法で発信していくことが大事であり、それによってこの制度の活用が広がるとも思っている。また、利用状況も 44 人が利用しているということで、関連し移住の状況についてどのようになっているか教えてほしい。
【政策推進課長】
移住・定住についてですが、移住では地域おこし協力隊制度があり、地域活性化と地域の移住２つの目的がある。実績が高く平成２５年度から採用しこれまで２９名の地域おこし協力隊を町で迎えている。現在は町内の方に定住・就職につながった方々は１２名となっており、町ではこの事業を今後も積極的に推進していきたい。
【岩村町長】
Ｕ・Ｉターン就職奨励事業については、八雲町に移住・定住をするため、何かのきっかけづくりの手段として大変有効であると思っている。八雲町は話に聞くとアパートの家賃も札幌市と同じくらい高いと聞いており、就職する際の生活の補助として行っている。佐藤委員がおっしゃるとおりＰＲが重要であり、高校にや外部にもＰＲしていきたいと思っている。良い事例については柔軟に取り入れ、定住・移住・雇用を進めていきたい。

７　その他

【寺田委員】
サーモン・ワイン・ウイスキーを特産品として売り出していくのは面白いが、なぜ八雲でその３つが必要か、八雲だからという考え方を聞かせてほしい。これらの事業は道内各地で行っており、実績のある中で八雲が市場に出て、それなりの地位や評価を獲得するには戦略が必要である。思い付きでは絶対いけない。美味しいのは当たり前であって、ストーリーが重要である。人は何にそれを求めるのか。それにはストーリーが必要であると思うが、町長はどのように考えているのか。
【町長】
ストーリーも大事だが、私は商売を行ってきた経験から利益を上げて持続できるかが重要であると考え、地域に貢献できるかが一番大事だと思っている。
トラウトサーモンの養殖事業は、当時、北海道内ではどこも行っていなかった。５年前からスタートし、ようやく卵からの飼育に取り組み海面に入れながら事業化に向けて進んでおり、道内において先駆的に行っている。現在、チリ産のサーモンは海面の問題で下火であり、さらにノルウェー産のサーモンも輸送費の問題等で北海道サーモンの引き合いが多いと聞いており、十分に事業化できると見込んでいる。様々なマーケットを見ながら進めたいと思っている。
ワインついても５年くらい前から計画しており、新幹線開業の際には小さくとも八雲らしいワインができたらと思っている。今年の秋にはようやく一定度のぶどうの量がとれるため、協力いただいているワイナリーに送りワインが形となる見込みである。さらに今年は協力隊を配置し、調査・計画を精査し１～２年で事業化になるか探っていきたい。
ウイスキー事業は大手の東京の会社が一緒にやりたいということで進んでいたが、大手の色々な事情とコロナの影響で話が進んでいなかったが、我々と近しい大手とさらに大きな会社２社と話がある。ウイスキーについてはどのように進めていくか未だ決まっていないが、大手と連携し行うことで可能性があると思っている。
【寺田委員】
商売だからこそストーリーが大事であり、思い付きでの発想ではなく想いがこもっていることが重要である。
また、八雲高校については良い議論だったと思うが、2030 年に新幹線が通ることで、函館や札幌も互いに通学圏内となる。如何に八雲高校に生徒を来てもらうか。出来れば新幹線を使ってでも来ていただける魅力のある学校にして行かなくてはいけない。それには時間がなく、今からでも議論をしていき新幹線駅に間に合うように進めることが大事だと感じた。
【町長】
確かにストーリーも大事だと思っている。持続できる範囲でやっていこうと思っている。高校の取組については必要と感じていたが、より一層取り組んでいかなくてはと感じた。全国では生まれている子供が 80 万人を切った。この子供たちが 16 歳になったときには、確

実に人口は減っている。道との協議も必要だが、全道的に特色ある学校をつくっていくことが大事だと感じた。どこの町も高校が必要であり、自分の町の高校に進学すれば制服を支給する。授業料を減免する。などの発想ばかりではあまり相応しくないため、子供たちのためになる学校を北海道と話をすすめながら取り組んでいく必要がある。

【舟田委員】

ストーリー性についてですが、私も 10 年くらい前にスイスにいってきた。どこの町を訪れてもワインとチーズはある。どうしてかというと畑作の出来ない土地や天気の悪い土地では、牛を飼ってチーズを作りそれを生業としている。平坦でない土地にブドウを植えてワインをつくる。ライン川の川下りをすると南側は全てブドウ畑だった。これらのことはテレビの番組でどう映るかはわからないが、訪れることで感じることだと思う。徳川さんが 100 年前訪れた所に八雲の人が行って、何を感じ何ができるのかを考えてもらえると、違うステップで進んでいけるのかと思う。

また、ワインは温暖化が進み、ボルドー地方などは温度が上がり発酵ができなくなっていると聞いている。そこで北海道の渡島半島に大手のワイナリーが進出していると聞いている。世界の農業の中でも中国がワインを飲み、アメリカ・ヨーロッパの農地がぶどう畑になっている動きも聞いている。

色々なストーリーの中で 100 年後に行った八雲の人たちが感じて八雲の未来をどういう風に考えていくのも一つのストーリーだと思う。

令和4年度第4回八雲町総合開発委員会出席者名簿

No.	区分	氏名	所属	出欠	備考
1	委員	大野　尚司	八雲町町内会等連絡協議会	○	
2	委員	井口　啓吉	熊石町内会等連絡協議会	○	
3	委員	近藤　安幸	八雲商工会	○	
4	委員	稲見　敦子	八雲商工会女性部	欠	
5	委員	本田　貴臣	八雲観光物産協会	○	
6	委員	舟田　進一	新函館農業協同組合北渡島運営委員会	○	
7	委員	梶田　孝女	JA新はこだて女性部八雲支店女性部	○	
8	委員	小川　勝士	八雲町漁業協同組合	○	
9	委員	久保　扶佐子	八雲町漁業協同組合女性部	欠	
10	委員	鎌田　和弘	落部漁業協同組合	○	
11	委員	木村　滋	ひやま漁業協同組合熊石支所	欠	
12	委員	能代　常男	八雲町社会福祉協議会	○	
13	委員	浅沼　真	連合北海道八雲地区連合会	○	
14	委員	西田　浩人	八雲町校長会	欠	
15	委員	阿部　政邦	八雲町体育協会	○	
16	委員	杉浦　則昭	北海道労働金庫八雲支店	○	
17	委員	小笠原　英毅	北里大学獣医学部	欠	
18	委員	青沼　千鶴	司法書士・行政書士やまびこ事務所	○	
19	委員	長谷部　修	一般公募	○	
20	委員	寺田　裕	一般公募	○	
21	委員	佐藤　馨	一般公募	○	
22	委員	東間　和浩	一般公募	○	
23	町	岩村　克詔	町長	○	
24	町	成田　耕治	副町長	○	
25	町	土井　寿彦	教育長	○	
26	町	竹内　友身	総務課長	○	
27	町	川崎　芳則	財務課長	○	
28	町	野口　義人	地域振興課長	○	
29	町	竹内　伸大	八雲総合病院事務長	○	
30	町	井口　貴光	商工観光労政課長	○	
31	町	渡辺　直樹	商工観光労政課　労政係長	○	
32	町	川口　拓也	政策推進課長	○	
33	町	上野　誠	政策推進課長補佐	○	
34	町	右門　真治	政策推進課政策企画係長	○	
35	町	長谷川　佳洋	政策推進課企画係主任	○	